

視 座

良い医師とはどのような医師のことか

宮城県医師会常任理事

福 與 なおみ

私たちは、「医師になればいい」といいと思って医学生や研修医に指導しているわけではなく、やはり「良い医師になってほしい」と思って指導している。が、いざその「良い医師像」を具体的に述べるとなると、答えるのに少し時間がほしいと思う。それは、その答えには自分の価値観が反映されることになるからではないだろうか。事実、良い教育のヒントとして、自己理解の重要性が提唱されている。『われわれは、我々自身を教えている。教育は、良かれ悪しかれ、人の内面から生まれる。』『どのような段階の教育であっても、教師の自我が鍵を握っている。』（P.J.パーマー『大学教師の自己改善—教える勇気』吉永契一郎訳、2000年、玉川大学出版部）

今回は、医師を育てるという観点で、医学教育の中の生涯教育、生涯教育としての医学教育、について概説したい。

まず、国内で生涯学習／教育という言葉が定着したのは、1980年代である。当時の報告書に、生涯学習とは、自己の充実や生活の向上のため、自発的意思に基づき、必要に応じ自己に適した手段・方法を自ら選んで行う学習、とされている。一方生涯教育とは、生涯学習のために社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ、総合的に整備・充実しようとする、とされている（1981年、中央教育審議会答申『生涯教育について』）。

海外では1960年代にすでに教育政策の中に生涯学習（生涯教育）が導入されていた。1965年のユネスコの精神教育国際推進委員会で述べられた提唱の影響が大きい。社会への変化へ適応するために人々へ幅広い教育を提供する必要がある、それは社会的平等のための手段で、そのためには学校教育中心の教育観を転換する必要があるというものだった。

その後1972年には、ユネスコの教育開発国際委員会で「未来の学習」として、資格や学歴や権力を持つための学習（learning to have）の対概念として、生きるための学習（learning to be）という概念が提唱された。通称『フォール・レポート』とよばれるこの報告書では、人格の発達に焦点をあて、教師や教育機関ではなく、学習者を教育の中心に据え、学歴よりも学習の過程でもたらされる成果を重視した内容になっている。具体的な内容は以下のとおりだ。科学・技術の急速な進展と、社会の変化の加速化のなかで、初期の教育が一生涯役立つことは誰にも保障されなくなっている。このため、学校だけでなく、社会生活、職場、余暇やメディアなどあらゆる要素によって知識を獲得することが必要となる。その際、とくに成人期においては、もはや教師が学習者に「教える」のではなく、社会によって提供される知識を学習者自身が直接に吸収するというスタイルとなることを提唱したのだ。さらに、人は判断力を培い、経験を豊かにしていくなかで、自らの必要、期待と能力に最も適切な学びの方法を自由に選ぶなくてはならない、という考えも示している。つまり、個々人の「生涯学習」を視野に入れながら「生涯教育」の推進を構想しているのである。

この概念は、医療の社会でも通用する概念だと考えられる。すなわち、進歩する医療技術や診断技術の中で、教科書に書かれていること、過去に教えてもらったことが生涯診療で通用するわけではない。一度診療した症例の治療方針が、同病の全ての患者に適用できるわけでもない。一度成功したインフォームド・コンセントだからといって、どの患者さんにも同じようにインフォームド・コンセントをすることはない。そのときどきの経験を豊かにしていくことで医師としての診療能力を高めるなかで、それらの経験をどのように今後の診療に活かすのか、が重要だ。そのためには、自らが学ばなければならない。事実、橋本信也「医師の生涯教育の現状と今後の課題」(医学教育, 2008)によると、医学教育における生涯教育の意義は、以下の4点にあるとされている。



- (1) 医療事故防止, 患者安全確保, 医療の質の向上
- (2) 医師の生涯教育は一般社会の生涯学習とは異なる(専門職としての職を全うするための研鑽)
- (3) 医師会が行うものと学会が行う専門医の資格認定や更新
- (4) 文献検索・講読, 同僚医師との勉強会, 論文執筆, 学会発表, 症例検討会, 臨床研究, 基礎医学的実験, など

1972年にユネスコによって提唱された「未来の学習」の概念は、人々の自己実現を最高の価値とし、学歴よりも学習歴を重視することが述べられており、世界各国の教育政策に多大な影響を与えた。しかしながら、その後各国において「生涯教育」政策は、部分的にしか実施できなかった。その要因は、実現のために教育の果たす役割に過剰な期待を寄せ、経済的・政治的条件を十分に考慮しなかったこととの見方もある。

それらの現状を踏まえ、理念中心ではなく、いかに改革を進めるかという点にも配慮された形で報告されたのが、1996年に21世紀教育国際委員会報告書『学習：秘められた宝』である。この報告書は、21世紀を展望する教育のあり方を示す目的でまとめられた。その概要は、まず、急速に進行するグローバル化、情報化にある中で、さまざまな問題と軋轢、それにより生じる不公正の拡大への直面という現代社会の課題を打ち出している。このような状況において、社会をいっそう住みやすく公正なものとするために、教育の使命とは、「すべての人が、例外なく、その能力や内に秘める創造性を発揮し、自らの人生に責任を持ち、人生設計を実現できるようにすること」と示した。そして、そのために必要なのが、「生涯にわたる教育を社会の中心に据えること」であり、将来の展望が閉ざされることなく、やり直しがいつでも可能となることが重要、と導いている。しかし、教育は、技能習得資格として経済に貢献するだけでなく、各人が内に秘めた才能や能力を開花させることが使命である点から、「生涯にわたる教育」とは、個人の調和のとれた継続的な発展をもたらす条件としてとらえることが重要であることを提唱している。具体的には、この生涯にわたる教育は、1) 知ることを学ぶ、2) なすことを学ぶ、3) とともに生きることを学ぶ、4) 存在することを学ぶ、が柱となる、とした。これらの柱を以下のように説明している。

「知ることを学ぶ」とは、生涯にわたる教育を活用できるように、学ぶことを学ぶ、ことである。「なすことを学ぶ」とは、職業資格だけではなく、多様な事態に対処する能力やチームで働く能力を身につけるために学ぶことである。「ともに生きることを学ぶ」とは、多元主義と相互理解と平和の価値を尊重して、共に生きることを学ぶ、ということである。グローバル化が進み相互依存の関係が深まる一方で、差別や偏見、対立が今なお存在するなか、この「ともに生きることを学ぶ」ことが、何よりも重要である。「存在することを学ぶ」とは、人格をいっそう開花させ、自律心、判断力、責任能力をもって行動できるように「存在することを学ぶ」のである。

良い医師とはどのような医師のことか、この答えを探すが、医師としての生涯学習ともいえるのかもしれない。